

Title	何が「歓待」を支えるのか
Author(s)	山本, 博之
Citation	歓待 = hospitalité (2011): 18-19
Issue Date	2011
URL	http://hdl.handle.net/2433/228939
Right	発行元の許可を得て登録しています.
Type	Article
Textversion	publisher

何が『歓待』を支えるのか

山本博之(京都大学地域研究統合情報センター准教授)

今の世の中では、生まれた土地から一度も離れず、よその土地からの訪問者にも一度も出会わずに生涯を送る人は珍しい。誰もが異邦人を迎えるかもしれないし、あるいは自分が異邦人になるかもしれない。このような状況で、人はどのようにして自分や他人に対して「ここにもよい」と思えるようになるのか。

『歓待』は、夏希と花太郎という2人の異邦人の物語だ。異邦人とは、顔かたちや言葉が違う人のことではない。花太郎は英語を話し、外国人の家族や親戚がいると言うが、花太郎が異邦人であるのはそのためではない。異邦人とは、今いる場で「なぜここにいるのか」の十分な説明がつかないとまわりから思われている人のことだ。その意味では夏希も異邦人にはかならない。夏希が小林家にいる根拠は幹夫の妻であることだが、その立場は危うげだ。たとえ同じような顔かたちで同じ言葉を話しているても、それだけでは「ここにもよい」とならない人たちがいる。そのような状況に置かれた人がどのようにして居場所を確保するかという『歓待』の問いは、外国人に限らず、職場や学校、さらには地域社会や家庭などで自分の居場所がないと感じているすべての人に開かれている。

夏希と花太郎の戦略は対照的だ。夏希は今いる場所を大切に、そこに溶け込むことで居場所を確保しようと努力する。それに対して、花太郎はどの土地でも異邦人のままで土地の人と同じように暮らしていく技術を身につけている。この2人の違いは、後片付けをすらかどうかにはつきり現れている。

夏希は、共同体の旗印を掲げることでその共同体の一員であるとアピールする。小林家という共同体の旗印として夏希が掲げたのはインコ探しだった。たかがインコと思うなかれ。共同体の旗印は、はじめは偶然選ばれたものであっても、人々に支えられているうちに重みが増してくるものだ。それは家族の共同体だけでなく職場や民族でも同じで、ある日突然、それまで何でもなかったものが「民族の誇り」などと語られ出す。もちろん、インコ自体が重要なわけではない。探し続けることに意味があるため、夏希はインコを見つけてはならない。夏希が作った貼り紙のインコの色が違っていたのは偶然ではない。

花太郎は、特定の土地に縛られず、訪れた先のどの土地でも暮らしていける技術を身につけている。語学力のことではない。暴力で脅すような不法行為には訴えず、言葉によって自分の要

求を実現していく交渉術だ。ときには相手の弱みを握って交渉することもあるが、その情報を公表するか別の決着をつけるかを相手に選ばせており、脅して言いなりにしているわけではない。また、ものごとを決定するとき場の多数派も慣例も重んじない。場の主人が言葉で伝えた決まりは守るが、それ以外のことは、自分が何をしたいか、それは禁じられているかの2点だけで決断し、目的に向かつて進んでいく。多数派と慣例を重んじないため、土地ごとのルールに束縛されない。花太郎が招いた外国人たちがどれも個性がないように見えるのは、彼らが出身地や民族性に囚われないコスモポリタンだからだ。

特定の土地に縛られずに世界各地を駆けまわるコスモポリタンは華々しい活躍を見せるが、その活躍はそれぞれの土地で舞台設営や後片付けをする人がいてこそ成立する。『歓待』の物語からは逸れるが、カイロの広場に集まって反政府デモを行っていた人々は、ムバラク大統領が辞任してデモを解散すると、帰宅する前に広場を掃除したという。今いる場を自分の居場所にしようとする夏希も、花太郎たちのパーティー騒ぎで散らかった部屋を幹夫と一緒に片付けていた。夏希は、平手打ちによって自分が幹夫にとってかけがえのない存在であると確信できた。それに対する夏希の行動は、幹夫と同様に自分もこの家の主人であって、「私は私のままでここにいてよい」という強い意

志が表れたものとなっている。

夏希と花太郎は対照的だが、2人の物語に共通しているのは起源の忘却だ。ものごとの起源は大切だが、それが事実かどうかはあまり重要ではない。インコを買ってきた夏希が「忘れるわよ」と言うように、人は起源を忘れるものだ。夏希が小林家に来た経緯も、そのうちにみんな忘れてしまい、最初からいたと思うようになるかもしれない。花太郎は、出資者の息子と名乗ることで、小林印刷という共同体の起源に自分をつなげてみせた。幹夫は花太郎の顔をはつきりと覚えていなかったし、「マイ・ネーム・イズ・ハナタロウ」としか名乗らないこの男が本当に「加川さん」なのかは実はわからない。アナベルとは偽装結婚を匂わせるし、花太郎が招いた外国人たちはどう見てもアナベルの親戚に見えない。それでも幹夫たちは素性がいまいのまま花太郎たちを受け入れた。

素性を明らかにしないまま受け入れる『歓待』の物語は、起源を正確に知ることの重要性ではなく、起源をあいまいにして付き合うことの大切さを示している。記憶の継承ではなく、記憶の忘却と書き換えが新しい関係を作る。同じ場に居合わせた人を歓待するのに必要なのは起源の記憶でもなければ制度でもない。国家や政府に頼らずとも私たち1人1人が持っているもの、すなわち忘れる力と信じる力なのだ。